

1. 事業概要

(1) 事業の目的

独立行政法人海洋研究開発機構（Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology : JAMSTEC ジャムステック）は、平和と福祉の理念に基づき、海洋に関する基盤的研究開発、海洋に関する学術研究に関する協力等の業務を総合的に行うことにより海洋科学技術の水準の向上を図るとともに、学術研究の発展に資することを目的として、2004年4月1日、前身の海洋科学技術センターから、独立行政法人として設置されました。

【独立行政法人海洋研究開発機構法（平成15年法律第95号）第4条】

(2) 事業の範囲

JAMSTEC では主に以下のような業務を行っています。

- ① 海洋に関する基盤的研究開発を行うとともに、その成果の普及、活用の促進を行っています。
- ② 大学及び大学共同利用機関における海洋に関する学術研究に対して、船舶の運航等の協力・支援を行っています。
- ③ 科学技術に関する研究開発又は学術研究を行う方に対し、機構の施設・設備を供与しています。
- ④ 海洋科学技術に関する研究者及び技術者を養成し、そ

の資質の向上を図っています。

- ⑤ 海洋科学技術に関する内外の情報及び資料の収集、整理、保管、提供を行っています。

【独立行政法人海洋研究開発機構法（平成15年法律第95号）第17条】

(3) 中期計画

JAMSTEC は独立行政法人通則法により、主務大臣である文部科学大臣から JAMSTEC が達成すべき業務運営に関する目標（中期目標）の指示を受けます。これを基に JAMSTEC では中期計画を作成し、更には事業年度ごとの年度計画を作成したうえで中期目標の達成に向けて業務を遂行します。平成21年4月1日から平成26年3月31日までの5年間を対象とした第2期中期計画では、海洋に関する研究開発による人類への貢献を目指すとともに、科学技術創造立国を標榜する我が国の持続的発展に資するため、海洋に関する基盤的研究と開発を通じて、海洋についての科学的知識を増大させ、地球環境の保全、防災、資源確保等、人類の生存にとって不可欠な、海洋が深く関わる諸問題の解決に積極的に貢献していくための数々の使命を果たし、これにより、海洋基本計画等に示された国の政策目標の達成に貢献することとしています。

第2期中期計画の概要

I 国民に対するサービス提供・業務の質の向上	
1. 海洋科学技術に関する基盤的研究開発 (1) 重点研究開発の推進 ①地球環境変動研究 ②地球内部ダイナミクス研究 ③海洋・極限環境生物圏研究 ④海洋資源の探査・活用技術の研究開発 ⑤海洋に関する基盤技術開発 (2) 統合国際深海掘削 (IODP) の総合的な推進 ①IODPにおける地球深部探査船の運用 ②掘削コア試料の保管・管理及び活用支援 ③国内における科学計画の推進 (3) 研究開発の多様な取り組み ①独創的・萌芽的な研究開発の推進 ②国等が主体的に推進するプロジェクトに対応する研究開発の推進 ③共同研究および研究協力 ④外部資金による研究の推進 ⑤国際的なプロジェクト等への対応	5. 研究者および技術者の養成と資質向上
2. 研究開発成果の普及および成果活用の促進 (1) 研究開発成果の情報発信 (2) 普及広報活動 (3) 研究開発成果の権利化および適切な管理	6. 情報および資料の収集、整理・分析、加工、保管および提供
3. 大学および大学共同利用機関における海洋に関する学術研究への協力	7. 評価の実施
4. 科学技術に関する研究開発または学術研究を行う者等への施設・設備の供用 (1) 船舶及び深海調査システム等の供用 (2) 施設・設備の供用 (3) 「地球シミュレータ」の供用 (4) 「地球深部探査船」の供用	8. 情報公開および個人情報保護
II 業務の効率化	
1. 組織の編成	2. 柔軟かつ効率的な組織の運営
3. 業務・人員の合理化・効率化	

他の項目など、中期目標・中期計画・年度計画の詳細については、<http://www.jamstec.go.jp/j/about/project/index.html> をご覧ください。

2. JAMSTEC の研究・開発・推進事業

(1) 研究・開発・推進事業の概要

<地球環境変動領域>

地球環境の変動を観測・解析・予測する



この数千年来、地球環境は、私たちに様々な恩恵を与え、人類の存続とその文明を守り育ててきましたが、近年、地球温暖化など人間活動に起因する急激な変化が地球環境に現れてきており、その実態を知り、原因を解明し、さらに将来の変化を予測することが、社会にとって緊急かつ大きな課題となっています。

地球環境変動領域は、多様な手法で海洋、大気、陸域、生態系を観測しそれらの変化の実態を捉え、それをもとに変化のメカニズムを知り、さらにこれらの様々な知識を統合した予測モデルを開発し、将来の環境変化のより確かな予測を目指しています。また、国内外の関係機関と連携し、全球地球観測システム(GEOSS)等の国際的な地球観測計画の推進や、気候変動に関する政府間パネル(IPCC)における地球環境問題の検討への積極的な関与を通して、世界の環境変動研究における日本のプレゼンスを支える柱として、気候変動対策の決定、さらには地球規模、全人類規模での社会の持続性確保に貢献していきます。

<地球内部ダイナミクス領域>

地球の内部を調べて「地球システム」を理解する



地球内部ダイナミクス領域では、地質学・地球物理学・地球化学・計算科学などのさまざまな手法を駆使して、地球の表層から核に

至る地球内部で起こる、さまざまな時間・空間スケールの変動を解析して、地球進化の謎を解き明かそうとしています。そして、地震・火山現象を引き起こす基本原理を解明し、さらには、これらの予測をすることによって、防災・減災にも貢献したいと考えています。

<海洋・極限環境生物圏領域>

未知の生物圏を探り生命起源を解明する



海洋・極限環境生物圏領域では地球創成以来の生命史を惑星地球の動的な活動と進化との関連という視点を持って検討しています。

とくに海洋を中心とする地球生命圏について、その構造と進化について解明し、大気・海洋圏および固体地球と一体になったシステムを構成していることを理解するとともに、地球環境変動と地球生命圏との相互作用を予測・評価することを目指します。また、多様な海洋・地殻内生物に潜在する資源としての有用性を掘り起こし、産業への応用も図ります。

<リーディングプロジェクト>

集中的な取り組みにより世界に貢献する



JAMSTEC では、巨大海溝型地震のリアルタイムモニタリングシステムの開発や IPCC 第 5 次評価報告書への対応等、国等が

主体的に推進する研究開発プロジェクトのうち、JAMSTEC として貢献が期待される研究開発課題について研究領域とは別に「リーディングプロジェクト」を設置して取り組んでおり、現在、以下の二つのプロジェクトが設置されています。

- 地震津波・防災研究プロジェクト
- 海底資源研究プロジェクト

<ラボシステム>

研究領域を融合し先進的な研究開発を進める



JAMSTEC では、既存の研究領域とは別に実施すべきと判断した研究課題を柔軟かつ迅速に実施するための仕組みとして「ラ

ボシステム」を導入しています。研究領域融合型のシステム科学的なアプローチで地球システムについて研究する「システム地球ラボ」、研究と社会との相互的啓発及び持続的連携によりイノベーションの実現を目指す「アプリケーションラボ」を設置し、先進的な研究開発を進めています。

<基盤的技術の研究開発・推進>

最先端の海洋科学技術開発や計画推進を行う



海洋や地球環境の調査・研究を進める上で、それを支える技術が非常に重要です。JAMSTEC は世界に誇る最先端の技術を有し

ており、主なものとして

- 船舶、パイプ潜水機器を使った海洋観測技術
- 地球深部探査船「ちきゅう」による海底掘削技術
- 大規模計算機における数値モデル及びシミュレーション技術の 3 つの分野が挙げられます。

また、高度な研究目標を達成するために、これらの技術やツール、また得られたデータについて、多様な研究分野や一般社会で効果的に活用できるようにする技術開発や体制整備にも重点的に取り組むとともに、これらインフラの安全かつ効率的な運用・計画推進を行っています。

(2) 研究活動行動規準

JAMSTEC では研究活動における不正行為などに対応するため、2006 年度から JAMSTEC の順守すべきポリシーとして「研究活動行動規準」を策定し、これに従い研究活動を行ってまいりましたが、研究者による不正は今なお社会的に問題となっており、また 2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災以降、研究者の社会への発言に対する誠実さがより求められていることなどを踏ま



研究活動行動規準

独立行政法人海洋研究開発機構（以下「JAMSTEC」という。）は、平和と福祉の理念に基づき、海洋に関する基盤的研究開発、海洋に関する学術研究に関する協力等の業務を統合的に行うことにより、海洋科学技術の水準の向上を図るとともに、学術研究の発展に資することを目的としています（独立行政法人海洋研究開発機構法第4条）。

JAMSTECにおいて研究活動に携わる私たちには、前述の目的を踏まえ、新たな真理を発見し、専門知識や技術を活かして人類の福祉、社会の安全と安寧、そして地球環境の持続性に貢献する責任があります。

研究活動は、いうまでもなく研究に携わる者一人一人の誠実性、自律性を基盤として行われるべきものであり、そこに不誠実性が存在することは許されません。特に科学活動とその成果が大きな影響力を持つ現代において、研究者は常に倫理的な判断に基づいて行動しなくてはなりません。

私たちは、ここに日々の研究活動において常に意識すべきことを、「研究活動行動規準」として制定し、その行動を自らが厳正に律する倫理観の確立を目指します。

1. 研究活動に携わる者として、常に誠実性、客観性、透明性をもって研究活動にあたり、課せられた社会的責任を全うします。
2. 研究活動に係る資金については、社会からの負託の基に供与されているものと強く認識し、適正な申請・管理・執行に務めます。
3. 研究活動における不正（研究に関わる捏造、改ざん、盗用、研究資金の不正使用等）を発見した場合には黙認せず、JAMSTECに所属する者として定められたルールに基づき、適切に対応します。
4. 指導的な立場にある者は、JAMSTECの方針に則り、各々の部門において誠実な研究活動を維持向上できる環境の構築に務め、研究活動における不正の余地が生じないように、日々適切なコミュニケーションを心がけます。

え、日本学術会議が定めた「科学者の行動規範」（2006年10月3日）を参考に、2012年10月に従来の規準を見直しました。JAMSTECでは、改正された基準に従い、これからも誠実に研究活動を実施して参ります。

(3) 業務の評価

文部科学省所管の独立行政法人であるJAMSTECは、文部科学省の独立行政法人評価委員会により毎事業年度の業務実績について、毎年評価を受けています。平成24年度の業務実績に対する評価の概要は以下のとおりです。

<全体評価>

- 業務の質の向上：A
- 業務運営の効率化：A
- 財務内容の改善：A

<評価の総括>

- 中期計画の達成に向けて順調に進捗している。
- 特に地球深部探査船「ちきゅう」の運用については、IODPによって計画された複数の研究航海やメタンハイドレート産出のための受託航海を、限られた航海日数の中で効率的・効果的に運用することで実現させた。いずれの航海においても、ライザー掘削を用いた科学海洋掘削における最深記録の更新や、掘削孔内への温度計の設置など、世界的にも顕著な成果を挙げており、高く評価できる。
- 長期ビジョンの策定とその浸透、またJAMSTECアドバイザーボードの設置と開催による国際的視点の導入など、理事長のリーダーシップが発揮されており、組織としての活性化に

つながっているものと認められる。

- 調達の適正化においては、より合理的な電子調達システムの導入やベストプラクティスの抽出など着実に前進していることを評価する。今後も引き続きこのような取組みを継続して、調達コストの削減の面でも成果を出すことを期待する。
- 普及広報活動においては、難しい分野・内容の話を分かりやすく発信し、国民に夢を与えることに貢献している。
- 個人情報の紛失が複数件発生しており、情報漏洩の予防策等は十分ではなかったと考えられる。今後、組織内の体制強化、予防策の周知徹底を図るとともに、情報セキュリティの面でも不断の対策が求められる。

<改善のポイント>

(1) 事業計画に関する事項

- 事業報告書の記載が個別・断片的であり、組織としての事業実績を把握することが難しい。研究開発の成果を社会に還元するためにも、個々の取組みや成果が中期計画の達成においてどのような位置づけにあるのかを明確にすることが必要であり、事業報告書の記載の仕方も含め対応が求められる。
- 組織としての広報戦略が一般的で、具体性に乏しい。海洋科学技術の発展に貢献する独立行政法人としての役割を踏まえ、広報戦略の見直しを行うことが求められる。

(2) 業務運営に関する事項

- 個人情報紛失が4件発生しており、情報漏洩の予防策等は十分ではなかったものと考えられる。今後、組織内の体制強化や定めた規定の周知徹底を図るとともに、機構の情報漏洩のリスクは高いという認識の下に、一層のセキュリティ強化に取り組むことが望まれる。
- 職員の意識はマネジメントが行った施策に反応し経時変化する

るため、それを分析して施策にフィードバックするための意識調査を定期的を実施（定点観測）する必要がある。

<特記事項>

- 「平成 23 年度業務実績評価」及び「独立行政法人の事務・事業の見直しの基本方針」等に適切に対応している。

<項目別評価>

評価区分	件数	項目
S	2	・IODP における地球深部探査船の運用 ・地球深部探査船の供用
A	37	・地球環境変動研究 ・海洋に関する基盤技術開発 など
B	1	・情報公開および個人情報保護
C・F	0	—

S：特に優れた実績を上げている。（客観的基準は事前に設けず、法人の業務の特性に応じて評価を付す。）

A：中期計画通り、または中期計画を上回って履行し、中期目標の達成に向かって順調、または中期目標を上回るペースで実績を上げている。（達成度が 100%以上）

B：中期計画通りに履行しているとは言えない面もあるが、工夫や努力によって、中期目標を達成し得ると判断される。（達成度が 70%以上 100%未満）

C：中期計画の履行が遅れており、中期目標達成のためには業務の改善が必要である。（達成度が 70%未満）

F：業務運営の抜本的な改善等を行う必要がある。

業務実績評価の詳細については

http://www.jamstec.go.jp/j/about/research_assessment/index.html

をご覧ください。



3. 組織構成

組 織 図

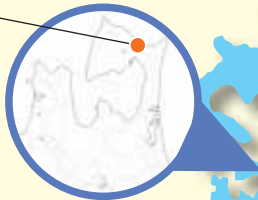


○ JAMSTEC の概要

(平成25年10月1日予定)

4. JAMSTEC の拠点（事業所）

むつ研究所
青森県むつ市大字関根字北関根 690 番地



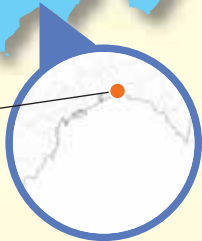
横浜研究所
神奈川県横浜市金沢区昭和町 3173 番地 25



東京事務所
東京都千代田区内幸町 2 丁目 2 番 2 号
富国生命ビル 23 階



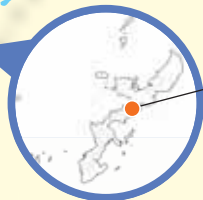
高知コア研究所
高知県南国市物部乙 200



横須賀本部
神奈川県横須賀市夏島町 2 番地 15



国際海洋環境情報センター (GODAC)
沖縄県名護市字豊原 224 番地 3



JAMSTEC TRIVIA



3. シートピア海中作業基地

JAMSTEC では、発足から潜水技術の研究開発が進められ、そこで得られた研究成果は我が国の潜水技術の発展へ大きく貢献しました。その最初のプロジェクトとして長時間の海中作業に必要な飽和潜水技術の開発に向けて海中居住実験「シートピア計画」が実施され、1975 年 10 月に静岡県内浦沖で 100m の潜水実験に成功しました。そのシートピア計画で使用されたシートピア海中作業基地が現在横須賀本部に設置、展示されています。

※「飽和潜水」はある一定の圧力環境で、その環境にあるガスと体に溶け込むガスが同じ圧力になった状態での潜水方法をいいます。「飽和潜水」は潜水作業時間に制約を受けることなく潜水時および浮上時の加圧・減圧を特定の条件下で行えば、長時間（1 カ月以上）安全に海中で活動することができる潜水方法です。



シートピア海中作業基地



往時の作業基地



海中作業の様子



5. 研究船・探査機・施設設備

船 舶

●海洋調査船「なつしま」

全 長	67.3m
幅	13.0m
深 さ	6.3m
喫 水	5.0m (ソナードーム含)
国 際 総トン数	1,739 トン
航海速力	約 11 ノット
航続距離	約 10,800 マイル
定 員	55 名 (乗組員 37 名 / 研究者等 18 名)
主推進機関	ディーゼル機関 625kW×2 基



●海洋調査船「かいよう」

全 長	61.5m
幅	28.0m
深 さ	10.6m
喫 水	6.3m
国 際 総トン数	3,350 トン
航海速力	約 13 ノット
航続距離	約 6,200 マイル
定 員	60 名 (乗組員 29 名 / 研究者等 31 名)
主推進機関	誘導電動機 860kW×4 基



●深海潜水調査船支援母船「よこすか」

全 長	105.2m
幅	16.0m
深 さ	7.3m
喫 水	4.7m
国 際 総トン数	4,439 トン
航海速力	約 16 ノット
航続距離	約 9,500 マイル
定 員	60 名 (乗組員 45 名 / 研究者等 15 名)
主推進機関	ディーゼル機関 2,206kW×2 基



◆「しんかい 6500」の支援母船

●深海調査研究船「かいらい」

全 長	106.0m
幅	16.0m
深 さ	7.3m
喫 水	4.7m
国 際 総トン数	4,517 トン
航海速力	約 16 ノット
航続距離	約 9,600 マイル
定 員	60 名 (乗組員 38 名 / 研究者等 22 名)
主推進機関	ディーゼル機関 2,206kW×2 基



◆「かいこう 7000 II」の支援母船

●海洋地球研究船「みらい」

全 長	128.5m
幅	19.0m
深 さ	10.5m
喫 水	6.9m
国 際 総トン数	8,687 トン
航海速力	約 16 ノット
航続距離	約 12,000 マイル
定 員	80 名 (乗組員 34 名 / 研究者等 46 名)
主推進機関	ディーゼル機関 1,838kW×4 基 推進電動機 700kW×2 基



●学術研究船「白鳳丸」

全 長	100.0m
幅	16.2m
深 さ	8.9m
喫 水	6.3m
国 際 総トン数	3,991 トン
航海速力	約 16 ノット
航続距離	約 12,000 マイル
定 員	89 名 (乗組員 54 名 / 研究者等 35 名)
主推進機関	4 サイクルディーゼル機関 1,900ps×4 台 電気推進モーター 460kW×2 台



船舶

●東北海洋生態系調査研究船「新青丸」

全 長 66.0m
 幅 13.0m
 深 さ 6.2m
 喫 水 4.5m
 国 際 総トン数 1,629 トン
 航海速力 約 12 ノット
 航続距離 約 6,500 マイル
 定 員 41 名 (乗組員 26 名 / 研究者等 15 名)
 主推進機関 推進電動機 1,300kW×2 基



●有人潜水調査船「しんかい 6500」

全 長 9.7m
 幅 2.8m
 高 さ 4.1m
 空中重量 26.7 トン
 最 大 潜航深度 6,500m
 通 常 潜航時間 8 時間
 ライフサポート 時間 129 時間
 乗 員 数 3 名 (パイロット 2 名 / 研究者 1 名)
 最大速力 2.7 ノット



過去に活躍した船舶

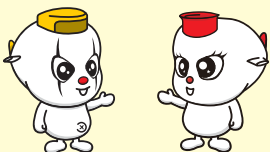
●有人潜水調査船「しんかい 2000」

全 長 9.3m
 幅 3.0m
 高 さ 2.9m
 空中重量 約 24 トン
 最 大 潜航深度 2,000m
 乗 員 数 3 名 (パイロット 2 名 / 研究者 1 名)
 耐圧殻内径 φ2.2m
 通 常 潜航時間 7 時間
 ペイロード 100kg (空中重量)
 水中速力 最大 3.0 ノット



主な搭載機器

CCD カラー TV カメラ (1 台)
 スーパーハープカラー TV カメラ (1 台)
 ステレオスチルカメラ (1 台)
 マニピュレータ (6 自由度 1 台) 流向流速計
 CTD (電気伝導度、温度、水深) / DO (容存酸素)
 その他航海装置等



●地球深部探査船「ちきゅう」

全 長 210m
 幅 38.0m
 深 さ 16.2m
 喫 水 9.2m
 国 際 総トン数 56,752 トン
 航海速力 約 12 ノット
 航続距離 約 14,800 マイル
 定 員 200 名
 推進システム ディーゼル電気推進



主な経歴

1981年 着水 (三菱重工 神戸造船所)
 1990年 500 回目の潜航 日本海奥尻海嶺 水深 1,624m
 1991年 「しんかい 6500」 調査潜航開始
 1998年 1,000 回目の潜航 南西諸島 伊平屋海域水深 1,027m
 2002年 1,411 回目の潜航 (11 月 11 日) 後、運航休止
 2004年 3 月をもってリタイア



探査機

●深海巡航探査機「うらしま」

最大
使用深度 3,500m

航続距離 100km 以上
(リチウムイオン
電池を搭載時)

300km 以上 (燃料電池を搭載時)

寸法 10m (L) × 1.3m (W) × 1.5m (H)

質量 約 8 トン (リチウムイオン電池を搭載時)
約 10 トン (燃料電池を搭載時)

速力 3 ノット (最大 4 ノット)

動力源 リチウムイオン電池または燃料電池



●3000m 級探査機「ハイパードルフィン」

全長 3.0m

幅 2.0m

高さ 2.3m

空中重量 3.8 トン

最大潜航深度 3,000m

最大速力 (前進 / 後進)
3 ノット / 2 ノット

最大速力 (横進 / 上昇・下降) 2 ノット / 1.5 ノット



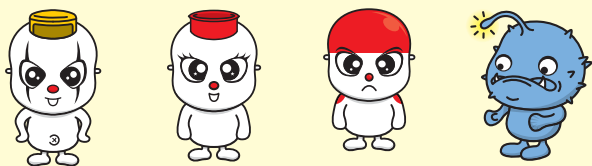
●深海曳航調査システム「ディープ・トウ」

全長数千メートルのケーブルの先端にソーナーやカメラを装備した曳航体を取り付け、海底付近をごく低速で曳航するシステム。



●7000m 級探査機「かいこう 7000 II」

	ランチャー	ピークル
全長	5.2m	3.0m
幅	2.6m	2.0m
高さ	3.2m	2.1m
空中重量	5.8 トン	3.9 トン
最大潜航深度	11,000m	7,000m



●深海探査機「じんべい」

サイズ 4m (L) × 1.1m (W) × 1.0m (H)

重量 1.7 トン

潜航深度 3,000m

速力 2 ノット

航行時間 10 時間程度



●深海探査機「おとひめ」

サイズ 2.5m (L) × 2.1m (W) × 1.4m (H)

重量 850kg

潜航深度 3,000m

速力 0.5 ~ 1.5 ノット

航行時間 8 時間程度



探査機

●深海探査機「ゆめいるか」

サイズ 5m(L)×1.2m(W)×1.2m(H)
 重量 2.7トン
 潜航深度 3,000m
 速力 2～3ノット
 航行時間 16時間程度



●高圧実験水槽

有効寸法 内径 1.4m×高さ 3m (有効容積：4.61 m³)
 最大使用圧力 147MPa
 昇降圧速度 0.39～3.9MPa/min
 加圧媒体 真水



●波動水槽

材質 鉄筋コンクリート
 水槽寸法 長さ 40m×幅 4m×深さ 2m (一部 2.3m)



施設設備

●地球シミュレータ

プロセッサ数 1,280個
 ノード数 160台
 ピーク性能 131TFLOPS
 (テラフロップス)
 主記憶容量 20TB
 (テラバイト)



●超音波水槽

材質 鉄筋コンクリート
 水槽寸法 長さ 9m×幅 9m×深さ 9m
 無響装置 壁面(5面)全体
 に吸音材(マイ
 ヤーゴム)を装備



●潜水訓練プール

構造 鉄筋コンクリート(水密)
 大きさ 長さ 21m×幅 21m×深さ 1.5m 及び 3.3m



●コア保管庫

庫内温度 4℃(冷凍保管庫は-20℃)
 広さ 1,978m²
 収納できるコアの本数
 約 162,000本

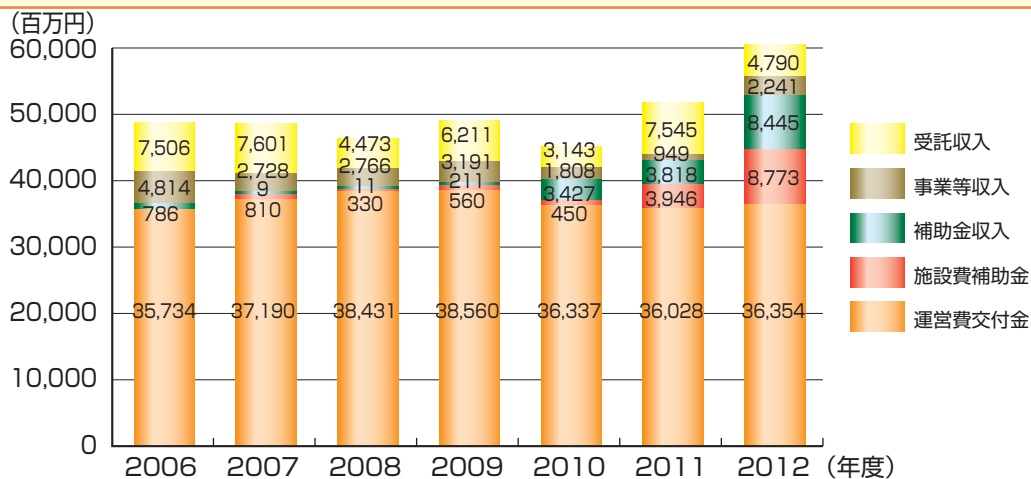




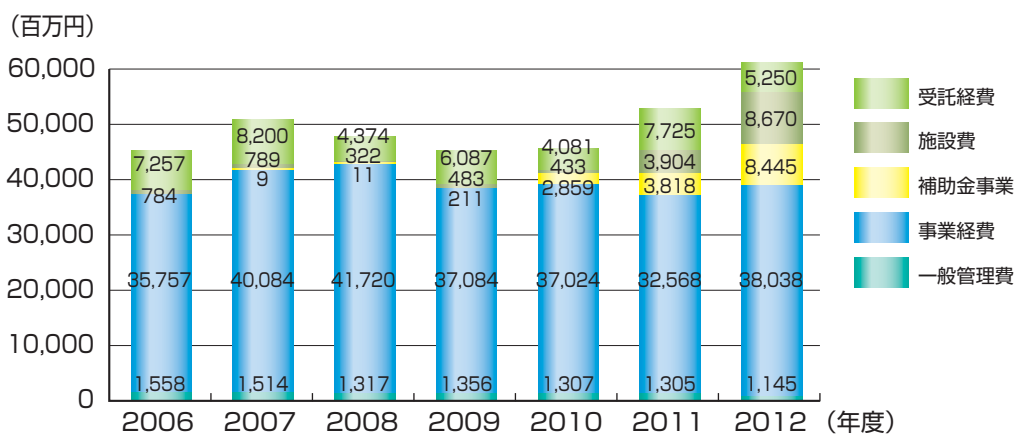
6. 経営指標

JAMSTEC 全体の収入、支出及び人員の推移は以下のとおりです。2004 年度より独立行政法人化され、収入及び支出について、以下のような区分で管理しています。

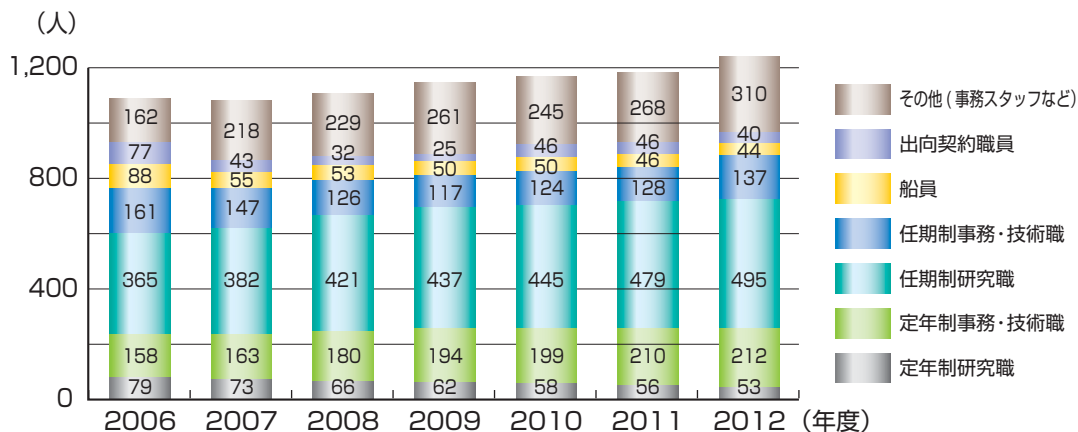
収入



支出



人員の推移



7. 沿革

1971年	10月	「海洋科学技術センター」設立
1981年	10月	「しんかい2000」／「なつしま」システム完成
1985年	5月	海中作業実験船「かいよう」竣工
1990年	4月	「しんかい6500」／「よこすか」システム完成
1995年	3月	10,000m級無人探査機「かいこう」がマリアナ海溝の世界最深部の潜航に成功
	10月	「むつ事業所」開設
1997年	1～2月	ロシア船籍タンカー「ナホトカ号」沈没部調査
	3月	深海調査研究船「かいらい」竣工
	9月	海洋地球研究船「みらい」竣工
	12月	学童疎開船「対馬丸」調査
2000年	10月	「ワシントン事務所」開設
	10月	「むつ研究所」発足
2001年	4月	「シアトル事務所」開設
	10月	実習船「えひめ丸」ハワイ沖引き揚げ調査協力
	11月	「国際海洋環境情報センター」開設
2002年	4月	「地球シミュレータ」世界最高の演算性能を達成
	8月	「横浜研究所」開設
	10月	地球深部探査センター発足
2004年	3月	「しんかい2000」廃船
	4月	「独立行政法人海洋研究開発機構」発足
2005年	2月	インドネシア・スマトラ島沖地震調査を実施
	2月	「うらしま」が世界新記録航続距離317kmを達成
	7月	地球深部探査船「ちきゅう」完成
	10月	「高知コア研究所」設立
2007年	3月	「シアトル事務所」閉鎖
	3月	「しんかい6500」1000回潜航を達成
	9月	地球深部探査船「ちきゅう」による「南海トラフ地震発生帯掘削計画」開始
2008年	2～3月	護衛艦「あたご」と漁船「清徳丸」衝突事故に関する海域調査を実施
	10月	IPCCのノーベル賞受賞に地球シミュレータが貢献
2009年	3月	地球シミュレータ更新
2011年	3月	東日本大震災に関する緊急調査を実施
		「ワシントン事務所」閉鎖
	11月	神戸サテライト開設
2013年	1月	学術研究船「淡青丸」退役
	2月	東北海洋生態系調査研究船「新青丸」進水

環境配慮活動の歩み

2003～2005年度		海洋調査観測活動に伴う海洋環境に対する影響等の諸調査を実施
2006年	3月	「環境への配慮に係る基本方針」策定
		「調査・観測活動に係る環境保全のための指針」策定
	9月	第1回目の環境報告書を発行
2008年	3月	「チーム・マイナス6%」プロジェクトに参加
2009年	4月	安全管理の方針等を審議する「安全会議」を「安全・環境会議」に改称
2010年	1月	「チャレンジ25」キャンペーンに参加